

平成29年 3 月24日

島田市議会議長 曾根 嘉明 様

地域活性化に関する特別委員会
委員長 福田 正男

地域活性化に関する調査研究について（報告）

本委員会は、調査した事件の結果について、委員会条例第36条の規定により別紙のとおり報告します。

記

- 1 調査事件 まちの魅力を生かして、独自性のある地域活性化の取り組みに関する調査研究
- 2 調査結果 別紙報告書のとおり

地域活性化に関する調査研究について (地域活性化に関する特別委員会最終報告書)

1 調査経過

- | | | |
|-----|-------------|--|
| 第1回 | 平成28年6月28日 | 委員長、副委員長の互選 |
| 第2回 | 平成28年7月21日 | (1) 委員会の進め方について |
| 第3回 | 平成28年9月21日 | (1) 所管事務調査の感想と意見について
(2) 目標値の設定について |
| 第4回 | 平成28年10月25日 | (1) 目標の設定について
(2) 目標に対する戦略提案について |
| 第5回 | 平成28年11月25日 | (1) 島田市のPRについて
(2) 提案事項の整理
(3) 視察先への質問事項 |
| 第6回 | 平成29年3月15日 | (1) 最終報告について |

2 視察調査

- | | |
|-------------|--|
| 平成28年8月24日 | 市内観光施設視察 |
| 平成28年12月21日 | 北の起業広場協同組合（北海道帯広市）
(1) 屋台村設立の経緯について
(2) 運営の状況について |
| 平成28年12月22日 | 釧路市役所（北海道釧路市）
(1) SLを活用した観光施策について
(2) 鉄道会社との連携について |

3 調査の報告

本委員会は、まちの魅力を生かして、独自性のある地域活性化の取り組みに関する調査研究のため、平成28年6月28日に設置されてから現在までの間、6回の委員会を開催し、平成28年8月と平成28年12月には視察調査を行った。調査概要は次のとおり。

(1) 委員会の経過及び所見

第1回＜平成28年6月28日＞

省略

第2回＜平成28年7月21日＞

最初に委員長から平成29年2月定例会で最終報告、及び提言を行うために委員同士で熱い議論をしていきたいとの考え方を述べた後、各委員より今後の進め方について発言

を求めた。

委員より、平成25年度に行った地域活性化に関する特別委員会では、地域ごとに検討した経過があり、今回は観光に特化して行いたいとの意見があり、観光をテーマに行うことに決定した。

また、委員長よりどのような点を特化すべきか意見を求めたところ、「大井川鐵道とどう連携していくか」、「観光客が通過型でなく着地型の観光として、観光客をどう宿泊させるか」、「夜の観光ができないか」、「観光地を回遊させる周遊型の観光ができないか」との意見が出された。また、次回は、市内の観光施設を視察することとした。

第3回＜平成28年9月21日＞

8月24日に行った市内視察について各委員の感想と意見を伺った。委員からは、博物館に関して、「博物館の学芸員の説明がすごく丁寧でよかった」、「特別展示物に対しての積極的なPRが必要ではないか」、「入ってすぐのホールが暗い」、「展示コーナーの整理が必要ではないか」、「芭蕉の石碑の看板がグラグラしていた」との意見が出された。

川越遺跡に関しては、「歩道としての整備が必要ではないか」、「補助金を利用して一般の家庭に格子をつけるなどの統一感を持たせる対策が必要なのではないか」、「高山などのように商店に入ってもらえないだろうか」との意見が出された。

川根温泉ホテルに関しては、「バイキングの金額が高いのではないか」、「島田市と無関係な商品があった」、「イルミネーションが冬使用のままだった」、「バイキングのメニューに地方感がなかった」との意見があった。

大井川鐵道に関しては、「SL自体が珍しいのでインパクトがあった」、「転車台や整備工場はインパクトのあるところなので、もう少し回れるような工夫があれば良い」、「SLイコール昭和のコンセプトの元、新金谷駅周辺を昭和風のイメージに市で誘導できないか」との意見があった。

旧東海道金谷石畳坂に関しては、「石畳茶屋で説明を聞きながらゆっくりできるといい」、「石畳へ入るところの看板がほとんどない」、「石畳茶屋の庭にある富士山のビューポイントの看板が良かった」との意見が出された。

蓬莱橋に関しては、「右岸側の整備が必要だと感じた」、「右岸に大型バスの駐車場を整備するなどして片道で歩ける形にしたほうがいいのではないか」との意見があった。

全体的には、「看板が少なくわかりにくい」、「それぞれの観光施設から見える富士山のビューポイントを示したらいいのではないか」、「観光施設をつなぐ周遊コースを作成できないか」などの意見があった。

その後、目標設定について議論したところ、「300万人の観光客数の実現」、「蓬莱橋観光客数15万人」、「既存観光資源の確認・広報」、「周遊ルートの作成」、「観光の新分野の開拓」などが挙げられ、施策については、「点になっている観光施設を線で結ぶ

こと」、「マップの作成」、「観光パンフレットの整理」、「観光関係組織の組織強化」、「市内観光地のスタンプラリー」、「ロケ地やアニメの舞台の掘り起こし」、「オリジナル商品の開発」、「おび通りに屋台村の設置」、「ストリートダンス大会」、「夏に蓮台越しのイベント」、「観光案内所の設置」、「激安ツアーに組み込んでもらう」などの意見が出された。

第4回＜平成28年10月25日＞

第3回委員会での意見を元に、目標設定を「観光入り込み客数300万人を目指す」ということを確認した。

また、第3回委員会で挙げられた具体的施策の整理を行った。内容を「島田市全体に関すること」、「組織に関すること」、「民間活力」、「各観光施設に関すること」の4つに分類し、それぞれについて検討した。

「島田市全体に関すること」については、さらに「観光資源の整理」、「観光資源の発掘」、「広報」、「観光資源を結ぶ」の4分割をして検討し、「観光資源の整理」、「観光資源の発掘」については、新たな観光客を呼ぶために、市場がありながら目を向けていないものに目を向けることが必要で、お手杵の槍や映画などのロケ地などが挙げられた。整理という観点からは、「旧市内、金谷、川根といった地域別に整理し、観光の企画をできないか」との意見が出された。

「広報」については、「重複している観光マップやパンフレットを整理する必要があるのではないか」との意見があった。「パンフレット作りには、コンセプトやキーワードといったものが必要ではないか」との意見があり、マップやパンフレットがどれだけあるか確認したいということで次回パンフレット等を集めることとした。

「観光資源を結ぶ」については、「観光タクシーや周遊バスの運行」、「滞在時間やテーマを考慮した観光ルートの設定」、「島田駅南口からのレンタサイクルを行ったらどうか」との意見が出された。

また、その他の意見として、「川越遺跡や鬮で有名なことを考慮し料金を設定し和服を着て市内を散策するサービスや、観光タクシーで必要となる運転手に補助金を出して人材育成していったらどうか」、「外国人向けに祈りをテーマにした観光ルートの作成」などが挙げられた。

「組織に関すること」については、「伊豆地域のように観光協会の局長をスカウトしてはどうか」、「観光協会を365日開所し、島田駅の降りたらすぐわかる場所にすべきではないか」、「駅前に観光案内所と観光用のお土産や島田の逸品の売店がほしいのではないか」との意見が出された。

「民間活力」については、「地域を活性化させようと努力している団体同士のネットワークができないか」、「島田への愛着を小さいときから育てていけないか」との意見が出された。

「各観光施設に関すること」については、賑わい交流拠点については、「地元の方が使える、売る、買う、働くような施設にしていきたい」、「用地は広く取ったほうが良い」、「昔のようななんでも詰め込むような施設は要らない」との意見が出された。また、川越遺跡では、「観光施設として整備するのであれば、歩道として整備できないか。」との意見が出された。

その他、全体的な意見として、「島田商業高校の生徒がオリジナルでデザインした緑茶をお土産として取り上げられないか。」、「地域ごとに桜や紅葉といったように植樹をして名所にできないか。」、「ベーゼンドルファーというピアノを2台保有している自治体はまずないだろうからそれも観光資源にできないか」との意見が出された。

今回の議論の中で、PRの仕方について検討することとした。

第5回＜平成28年11月25日＞

第4回で議論のあったPRの仕方について検討を行った。パンフレットやマップを確認しながら行ったが、「歩いて回る、車で回る、食べ物といった分野別のパンフレットの作成をしたらどうか」、「あえて解かりにくい地図で迷いながら目的地に行くといった方法もいいのではないか」、「同じ競争をしたら他の観光地には負けてしまうため、島田にしかないような方法でアピールできないか」、「別枠で周遊コースを設定して掲載したらどうか」、「女性ならバックに入るサイズ、男性ならポケットに入るサイズのパンフレットができるといいのではないか」との意見があった。

またPR方法では、「メディアを活用して情報を外部へ発信していく方法やインターネット、ホームページを利用できないか」との意見が出された。具体的な案として「目的地に行く際はインターネットで調べることが多いと考察できるため、観光施設等をデータベース化し、検索がしやすい状況を作る必要があるのではないか」、「データベース化した観光施設をいくつか選択し、それを回るルートを作成するようなことができないか」との意見が出た。

「市内を歩いて回るコースが載っているもの、車で広範囲に回れるもの、食べ物を中心としたもの、それぞれを統一したものがあるといいのではないか」、「細かな内容はインターネットで検索できるようなものがあるといいのではないだろうか」との意見が出された。

第6回＜平成29年3月15日＞

前回までに行った各委員が提示した施策を元に地域活性化における課題を整理し、提言をまとめる作業を行った。

(2) 視察の経過及び所見

市内視察＜平成28年8月24日＞

執行当局に協力していただき、島田市内の観光施設を視察した。

当日は、当委員会の委員は市外からの観光客という設定で、市観光課職員の案内により市内の観光コースを視察した。

平成28年8月24日（水）午前9時00分に市役所を出発し、島田市博物館・川越遺跡を視察した。島田市博物館・川越遺跡では、学芸員より島田大祭の歴史や川留め文化など丁寧な説明を受けながら館内を見学した。

次に、川根温泉ホテルへ移動しバイキング形式の昼食を取った。入館時は昼食時間には少し早い時間であったため、すぐに食事を取ることができたが、当日は夏休み中でもあったため、食事後にはロビーで多くの観光客が順番待ちとなっていた。

午後より大井川鉄道(株)の車両工場を見学し、SL蒸気機関車の整備作業を見学した。ここは、通常でも入場料を払えば見学できる場所となっており、見学スペースも完備されていて、当日は大井川鉄道(株)職員の説明により、現在点検整備中のSL蒸気機関車を間近で見学することができた。

次に、旧東海道金谷石畳坂を散策した。初め石畳茶屋において観光ガイドボランティアより石畳坂の歴史などについて説明を受け、観光ガイドボランティアとともに実際に石畳坂を石畳茶屋からすべらず地蔵を経て牧之原台地まで散策した。

最後に移動を兼ねて牧之原大茶園を見ながら蓬莱橋へ向かい、蓬莱橋では初倉側から島田側へと渡り、島田の番小屋横で蓬莱橋の歴史などについて説明を受けた。

今回は観光施設等の視察が目的であったため、全体としては時間的にも余裕があり、ゆったりと観光できるスケジュールであったが、観光としてはお土産処や休憩所などに立ち寄る機会がなかったことから、経済的な視点での検証も必要と思われる。

北の起業広場協同組合、釧路市視察＜12月21日・22日・23日＞

1 北の起業広場協同組合について（北海道帯広市）

北海道帯広市は、北海道東部の十勝地方のほぼ中央に位置する。人口約16万8,000人で、農業を主要産業とする十勝地方の農産物集積地及び商業都市としての役割を担っている。

北の起業広場協同組合の成り立ちは、まちなかから大型店舗が郊外へ移転し、駐車場がふえて空洞化状態になっていく街を見て、「何とかしなくてはならない」と考え平成8年3月に帯広青年会議所（JC）のメンバーを核にして、主婦や学生、医者を含む40人程度が集まり、「十勝環境ラボラトリー」が発足。この組織が9つほどの事業を展開していく。その中の都市構想プロジェクトという事業で、場所の特性を活かした独自のまちづくりを研究実践していこうとする勉強会を続けていき、最終的に北の屋台構想へ発展していくとの説明があった。

平成10年に大店舗小売店法が廃止になり、まちづくり三法が制定され、帯広市主導で

基本計画策定のために委員会を立ち上げていくことになる。十勝環境ラボラトリーのメンバー数名もこの委員会に呼ばれるが、こちらからの要望を聞いてもらえない状況があり、自分たちの手でまちづくりを行おうと、「まちづくり・ひとづくり交流会」と名前を替え、自分たちの手で何かをしたいと会合を重ねたとのことだった。

そのメンバーが海外などへの出張先で屋台を多く目にし、人が集まり活気がある「屋台」をやってみようという話になり、まず1台購入し、メンバー40人で運営、儲けがでたら次を購入という構想にたどり着く。

それまでの活動や海外などへの出張等で見つけたいろいろな屋台の写真を冊子にまとめ発表したところ、全国中小企業団体中央会の目にとまり、補助金をいただけることになり、帯広商工会議所「北の屋台ネット委員会」に組織変更し、全国の屋台を視察することになった。

視察していくと、いろいろな問題があることがわかる。特に屋台は一代限りであり、代替わりができない。また、屋台の運搬や組み立て解体など重労働であるということがあり、屋台は消滅していつているという現状があった。

さらに、法律の壁が立ちふさがる。道路法、道路交通法により、公道での営業は1週間の臨時営業はできるが恒久的な営業は認めていない。そのため、場所については、市内にふえている駐車場を借りてそこに屋台を設置することで問題を解消した。

次に食品衛生法である。屋台は露店として扱われ、営業許可は1週間で、店舗としての許可は出せない。そこで、私有地を借りて行うのであれば、上下水道、電気ガスなどのインフラを整備し、三方を壁で囲み、屋根をつけて固定化し、食堂として営業することを考案した。厨房部分を固定化することにより、移動や組立、収納といった作業の軽減。さらに、露店としては提供できなかった「生もの」や、「ご飯もの」の提供が可能になった。

今度は建物を建てることになったので、消防法、建築基準法で、1つの敷地の中に同一の建物は一棟しか建てられないということで、まず、土地を1番街から4番街と4つに区画整理し、同一区画にある建物の屋根を連結することで1つの建物とし問題を解決したとのことだった。

そして平成12年2月、北の起業広場協同組合が設立され、活動知ってもらうため、ホームページや、パネル展などの広報、また、冬の寒さを体感する実験を行い、平成13年7月29日に開業している。地産地消を目的に食材フェアなどイベント、昼間の開店前にイベントを行うなどして、集客に力を入れていた。

北の起業広場協同組合では、①人を集める、②起業・創業、③地産地消の3つの柱を掲げ中心市街地を活性化したいという基本コンセプトを掲げていた。最終的には補助金をもらって行ったこともあったが、補助金を当てにすると自分たちの思ったことができなくなるという考えから補助金を当てにしないというスタンスであった。

現在の20軒の年間売り上げは3億円程度。年間12万人程度が訪れ、ピーク時は17万人

が訪れたとのこと。平成29年4月から始まる第6期の募集が行われ、新規の申し込みが40件あり、4件が新規参入することになったとのこと。

店主との契約期間は1期3年を基本とし、ここから独立・開業するインキュベーションとしての機能を持たせていた。15年間で60軒のお店が入り、20軒弱が独立している。また、この15年が経って、まわりには居酒屋がかなりふえ、ある意味では中心市街地の活性化について目的を達成できたのではないかと考えているということだった。

組合の理事は帯広商工会議所の会員7名、理事長は商工会議所の副会長が就任し、幹事が公認会計士と弁護士の2名で月1回理事会を開催している。店主は組合員ではなく、組合の今後の予定等を連絡するため、店主会を月1回行い、店主側から意見があればこの会で聞くようにしている。広告宣伝等は全て組合が行い、店主は接客に集中しているとのことだった。

敷地面積は550平方メートル、約160坪で20軒の店舗とトイレを完備し、敷地中央にはシンボル像イキヌキンという像が建てられており、お客さんにほっと息抜きしてもらおうという優しさの面と、店主はここで生き抜き開業してもらおうという力強さの面という両面の意味を持って形づくられていた。

店舗については、3メートル×3.3メートル。（3坪）。厨房が3メートル×1.3メートルで、残り6平方メートルにはカウンターと8人が座ることができるくらいの広さがある。組合が所有している厨房部分の家賃は月8万円、共益費が4万円。電気ガス水道は個別である。ゴミの処分に関しては折半とのことだった。初期投資については250万円から300万円程度であるとのことだった。

現在は、商店街との連携事業の拡大や地場産品の魅力の深堀り、地産地消の深化、道内の屋台との連携に力を入れていきたいとの話があった。

島田市において、観光客を通過型から滞在型を増加させる議論するなかでの北の起業広場協同組合への視察であった。ある店主は、最初同業者から「どうせすぐ潰れるんだから」と言われたと話されていた。しかし、15年が経ち、この北の屋台を中心に、多くの店舗が店を構え、平日でも多くの人を訪れていた。民間の活動ではあるが、まちの活性化を考える上で有効な手段の一つではないかと考える。この組合の考え方や手法は人を集めるだけでなく、地場産品の利用、企業・創業といった所まで及び、多くの相乗効果をもたらしたものであると感じた。

2 SLを絡めた観光について<北海道釧路市>

北海道釧路市は、北海道の東部の太平洋側に位置する人口約17万5,000人の都市。酪農を主力とする農業、国内有数の水揚げ量を誇る水産業を中心に、釧路湿原、阿寒の二つの国立公園の主要な宿泊地となっている。

釧路市では、平成11年9月に沿線自治体である釧路市、釧路町、標茶町、弟子屈町と北海道釧路支庁、釧路観光連盟、JR北海道が共同して冬季観光の魅力アップに向けたプロモーションや、受け入れ体制の整備推進等、各種事業に取り組み、SL運行を核と

した広域的な観光資源の開発や地域活性化を図ることを目的として釧網線SL運行推進協議会を設立し、標茶町の児童公園に展示されていたSLを使用し、平成12年1月8日から釧網線の釧路から標茶間約50kmを運行したのが始まりとのことだった。以後、一時は、弟子屈町にある川湯温泉駅まで約70kmまで延長し運行していたとのことである。当初SLを2台体制で運行していたが、ここ数年は、SLの部品が無いことや維持管理をするにあたり1億円に近い費用がかかるため、現在は1台体制となった。現在は北海道で唯一SLの走る場所であるとのことである。SLの運行は、一回の乗車が280名ほどだが予約で完売するとのこと。また、3割から多いときで6割がインバウンドの乗客であるとのことである。

現在、協議会は釧路総合振興局と鶴居村、JR北海道釧路支社が参加し、SLだけでなくこの地域を面で冬の観光のPRしようと、くしろ地域冬季観光開発協議会と名称を変更し活動を継続している。まだ、他にも参加していない自治体との連携を模索しているとのことだった。SLの運行については、JR北海道本社へ要望活動を行い、存続と実施機関の延長をお願いしているとのことだった。また、SL冬の湿原号の出発式や、ポスターの作成、札幌駅でプロモーション活動を行うなど、協議会ではこの事業のサポートを行っていた。また、この協議会でガイド料を支払い、ネイチャーガイドを運行全期間に各市町から乗車させ要所で観光案内といったサービスを行っているとのことである。標茶町においては、運行期間の最初と最後には到着駅ということで駅前にテントを張るなどしてPRを行っており、その他の市町では自治体PRデーを設け、最低1日列車に乗り込みPRを行っているとのことだった。さらに、いままで地方の旅行雑誌に宣伝広告を載せていたが、今年度からは、ターゲットを50歳代から60歳代が多く読んでいるといわれている全国版の旅行雑誌に掲載をしたとのことだった。

釧路市では、観光客がこういったルートで観光をしているのかというものを、専門人材がマーケティング調査を行うことになっているということ。また、公衆Wi-Fiを利用し、観光客のアプリの利用状況を確認してどのようなルートで移動しているのかというアクセスログをためて傾向を把握する。さらに、ことし、釧路市の公式アプリを作成し、衛星の座標からその方がどのように移動したかがわかるような仕組みを利用し、Wi-Fiのアクセスログと連携させていく仕組みを予算要求しているとのことだった。当市においても、大井川鐵道のSLという観光資源を生かせるよう、沿線である川根本町との連携を強化するとともに、昨年発表された5市2町による観光DMOにおいても、釧路市のように観光客の傾向をつかむような施策を展開させる必要があるのではないかと考えさせられた視察だった。

4 まとめ（提言）

島田市議会「地域活性化に関する特別委員会」においては、活性化の方策を観光に特化し、目標「観光入り込み客数300万人」に設定して議論を進めた。以下提言する。

提言1 既存の観光資源の整理と発掘

- ・ 市民でも市内のことを全て知っているわけではないため、今まである観光施設を地区別で、それぞれの地区の特色を出せるよう整理し、どの観光資源を光らせていくかというような選択と集中を行うこと
- ・ 近年では「御手杵の槍」のように新たな観光資源が生まれている。新しいものに目を向け、新たな観光客を呼び込むよう広報していくこと
- ・ 整理や発掘した観光資源は市民に知られるよう取り組むこと

提言2 広報（PR）

- ・ インターネットから情報を収集しやすいように観光資源をデータベース化し、すぐに閲覧できるようにすること
- ・ 話題性のある内容やキャッチフレーズ、メディアを活用したPRに努めること
- ・ パンフレットは官民が連携し、散策やドライブ、食べ物といった形で3種類程度に整理すること
- ・ 市内視察を行った際、観光資源への看板が少なく感じた。観光客を誘導できるよう看板を設置すること

提言3 観光資源を結ぶ

- ・ 静岡空港へのアクセスバスを有効活用するため、路線の変更と、停留所の設置を県に要望すること
- ・ 観光資源と観光資源を結ぶ観光ルートの作成に取り組むこと
- ・ 市内のタクシー業者と連携し、観光タクシーを運行し、ガイドができるようなおもてなし運転手を育成すること
- ・ 滞在時間やテーマを考慮した観光ルートの設定に取り組むこと
- ・ 周遊バスを設置し、観光資源をつなぐこと
- ・ 島田市内各駅からのレンタサイクルの設置に取り組むこと

提言4 組織の醸成

- ・ 観光を基軸として、稼ぐまちの要になるよう組織のあり方を考え、観光協会の事務局長をスカウトしてくるなど、専門性を持たせて事業の開拓を行うこと
- ・ 駅前に年間を通じて開所するお土産や島田の逸品の販売店と観光案内所を設置すること

提言5 民間活力

- ・ 地域の人たちに観光客に対する意識を高めて、みんなで盛り上げようという意識の醸成を図ること
- ・ 島田への愛着を小さいときから育てていくよう努めること
- ・ 地域を活性化させようと努力している団体同士のネットワークに取り組むこと
- ・ 市内中心地に屋台村のような賑わい施設を設置すること

提言6 観光資源

- ・ 蓬莱橋等のオリジナル商品の開発を進めること
- ・ 市内高等学校の生徒がオリジナルでデザインしたパッケージのお茶をお土産として取り上げるよう努めること
- ・ 観光客を滞在させるような施策に取り組むこと
- ・ 大井川鐵道のSLという観光資源を生かせるよう、沿線である川根本町と大井川鐵道株式会社との連携を強化すること
- ・ 市内に2台ある、ピアノ世界三大名器といわれる「ベーゼンドルファー」を観光資源として活用するよう努めること
- ・ 市が進める緑茶化計画とタイアップした茶に関連した観光施策を進めること

以上、市当局へ提言する。